

びろっば

Vol. 438

1

近森病院 川井和哉 新院長就任

表紙の写真



近森会 入江博之副理事長就任

医療情報 コロナとの戦いの記録〈第4回〉

日本脳卒中学会

一次脳卒中センターコア施設認定

MVP受賞者発表

近森病院 新院長 就任

〈2023年1月1日〜〉

川井 和哉

近森病院院長 兼 循環器内科部長
近森会理事



Kazuya Kawai

チーム医療を極めニーズに伝える

1月1日、社会医療法人近森会 近森病院院長を拝命いたしました。当院76年の歴史を考えると責任の重さに身が引き締まる思いです。さらなる発展と高知県への医療貢献を目指して努めていく所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

1991年 野戦病院さながらの時代に着任

高知市生まれの高知育ちです。土佐高等学校52回生で東京医科大学に進み、卒業後は麻酔科医として6年間勤務しました。ふるさとに貢献したいとの思いが強く、1989年に高知医科大学老年病科(現、高知大学老年病・循環器内科学講座)に入局し、循環器内科医としての医師生活がスタートしました。ご縁があり、1991年10月から当院内科に8人目の医師として着任いたしました。「救急の近森」と言われるだけあって、まさに野戦病院さながらの忙しさでした。メディカルスタッフのモチベーションは高く、「一緒に高知の救急医療を支えている」という誇りを持って、素晴らしい仲間達と楽しく仕事をすることができました。

512床 スタッフ数1,600名を超える病院へ

その後の当院の発展は著しく、2003年2月には地域医療支援病院に承認され、10月には管理型臨床研修病院として指定されました。2011年5月には救命救急センターに指定されました。5カ年計画で急性期の近森病院は338床から452床に増床、総合心療センターの急性期精神科病床60床を統合し512床になりました。8名だった内科医は今や55名の大所帯となり隔世の感があります。

「何ができるかでなく、何をすべきか」を考え 最大限の強みである「人」を活かして

浜重直久前副院長の教えである「何ができるかでなく、何をすべきか」を考え、様々な役割を経験させていただきました。2009年から循環器内科主任部長に、2017年からは副院長に就任し、入職から30年が過ぎました。その間にはいくつかの危機もありましたが、当院らしい柔軟な対応や自己変革によって乗り切り、常に前進して参りました。振り返ってみ

ても職員の献身的・効率的サポートのおかげであり、感謝しかありません。チーム医療の神髄が、ここ近森病院にあります。当院の最大の強みはまさに「人」にあると思っています。

透明性を高め より働きやすい職場にしていきたい

わが国で新型コロナウイルス感染症患者が確認されてから、3年が経とうとしています。大災害級のイベントであり、当院も大きな影響を受けました。しかし、自律自働する当院スタッフの状況に応じた迅速な対応や職種を超えた協力的体制に改めて頼もしさを感じました。

ウクライナ戦争など想像もできなかったことが起こる世の中です。診療報酬改定や医師の働き方改革など対応すべきことも山積しています。38年間当院を引っ張ってきたカリスマ近森正幸院長からの交代ですのでプレッシャーも大きいですが、今まで以上にコミュニケーションをとり透明性を高め、医師だけでなく全職員の働き方改革を進め、より働きやすい職場にしていきたいと思えます。

新しい近森病院を築いていく

「救急医療」、「高度医療」、「地域連携」、そして「人材育成」を柱に地域のニーズに応えながら、チーム医療を推進し、原点である「救急の近森」として成長していきたいと思えます。全職員がワンチームとなり、「一歩先の医療、一つ先の未来」を見据えて新しい近森病院を築いていきましょう。

“どうせやるなら楽しくやろう”をモットーに、患者さんや他の医師、そして、何よりも院内のスタッフに信頼される医療を提供し続けていきたいと思えます。これからも何卒よろしく願い申し上げます。

Profile 1983年 東京医科大学 卒業 麻酔科入局
1987年 東京医科大学大学院 修了
1989年 高知医科大学 老年病科
1991年 近森病院 内科
2009年 循環器内科 主任部長
2017年 副院長
●専門分野／循環器内科全般、特に虚血性心疾患、弁膜症、心不全など
●趣味／若手の育成、ゴルフ、楽しい飲み会



毎週金曜日、朝9時から管理棟9階で近森正幸理事長と一緒に病院経営会議を行い、川井和哉院長、入江博之副院長を中心に管理部幹部と、病院の経営や運営、プロジェクトの進捗状況など医療を取り巻くあらゆることを議論し方針を決定している。

近森会 副理事長 就任

〈 2023年1月1日〜 〉

入江 博之

近森会副理事長
近森病院副院長 兼 心臓血管外科主任部長



Hiroyuki Drie

- Profile**
- 1983年 岡山大学医学部 卒業
 - 1988年 岡山大学大学院 修了
 - 1989年 米国オハイオ州クリーブランドクリニック 留学
 - 1992年 福山市民病院 心臓血管外科
 - 1994年 岡山大学医学部附属病院 心臓血管外科
 - 1996年 ニュージーランド オークランド大学グリーンレーン病院 留学
 - 2000年 近森病院心臓血管外科 部長
 - 2017年 副院長
 - 専門分野／成人心臓手術及び大動脈治療
 - 趣味／オペラ鑑賞、歴史書読書

日本は急速に高齢化、人口減少が進んでいます。特に就労人口減少による問題が、今後は大きくなっていくものと思われま

1. 将来計画と人材発掘

全国レベルの治療を提供する施設として、また地域の方々に信頼される病院であり続けるために、近森会グループ全体の将来計画を進めていく必要があります。医療の高度化、医療費用の上昇、就労人口減少のなか今後の近森病院を支えていく人材を発掘、育成する必要があります。

若いときに習得した知識や技術のみで、一生を終われる時代ではなくなりました。働きながら自己のレベルアップを図り、時代に必要とされる技術、経験を育ててくれる人を見出したいと思

2. 近森会ヘルスケアグループの改編

急速な高齢化、予想以上に早い人口減少、さらに物価上昇を伴う経済情勢の大きな変化が予想されています。個人の価値観の多様化や働き方改革による影響もあります。一方足下では、医療制度改革に伴い、高度急性期、回復期、地域包括といった病院の条件が変わりつつあります。グループとしてこれらに対応する必要があります。また、高いレベルの医療を提供しながら次世代への投資ができるように、不要な支出を抑えたり、効率化することも必要です。グループとしての収益を確保し、働く人々が幸せを感じ、患者さんを幸せにしたいという意欲を持ち続けられるようにしたいと思います。

最後になりましたが、近森理事長の指揮下、川井新院長と力を合わせて、職員、関係者はもとより、地域の方々に「あって良かった」と言って頂けるようなグループにしていきたいと思

これからの近森会に向けて



コロナとの戦いの記録

シリーズ
第4回



“一つの災害”ともいえるコロナ禍から、各部署がどのような影響を受けどの様に対応したか、また、どういった思いで奮闘しているのかなどを情報共有として、また後世に残す記録として当誌で取り上げて参ります。

診療支援部

診療支援部 部長 山崎 啓嗣
やまさき ひろつく



明日からでなく、今日からでもなく、いまからやる

管理部のコロナ対応は、2020年4月の入手困難な資材確保から始まりましたが、それから2年半、何とか診療現場に影響が出ないよう必死に伴走してきたというのが率直な感想です。古参職員からは「近森は走りながら考える。」との教えを受けてきましたが、コロナ対応は正にその象徴だったと思います。明日からでなく、今日からでもなく、いまからやる。といったスピード感で進みながらどんどん対応を変えていくので管理部も相当に鍛えられました。

安全には、熱い思いと冷静な対応が不可欠

病棟のゾーニングでは、要請を受けた数時間後には環境整備を終えることが当たり前になりましたし、状況によっては管理部スタッフも感染エリア内に立ち入り、それぞれが惜みない支援を行ってくれました。現場と同じ感覚で走っているからこそ一体感も醸成されたのだと感じています。ただ、反省点もありました。2022年2月のクラスター発生時は、現場が混乱する中、支援に入った管理部職員の感染が複数名確認されました。現場の支援には熱い思いだけでなく常に冷静な対応、スタッフの安全を忘れてはいけないことに気付かされました。



2022年11月22日で5回目のコロナ病棟立ち上げ。初回は準備に1日かかったが、今は手順も確立され、それぞれが能動的に作業し、2時間程度で病棟変更ができるようになった。戸惑うこともあった感染防護衣着用は、感染対策チームの指導を受け、自分たちで着脱して立ち入るまでに。



状況に応じた運用変更や情報共有の難しさに直面しながら

このように、管理部のコロナ対応というと現場の支援(環境整備)に目が行きがちですが、バックヤードにおいてもそれぞれが汗をかいてくれました。医事課の受付業務では、全入館者の体温チェック、面会禁止に伴う入院患者さんの荷物受け渡しや取引業者の管理、発熱患者さんへの問診内容変更や記録見直しなど様々です。また、入院、外来ともに請求事務においては、次々に特例対応の通知や疑義解釈が発出され、その解釈や不慣れな実務対応、また、関係者への情報共有には大変な苦労もありました。医事課長の「何とかここまでやってきた。」というつぶやきが耳に残っています。

病棟に大量に準備された感染性廃棄物ボックス



感染防護衣を着用して懸命に

他にも、危機管理部に属する配車センターでは、感染対策としてドクターカーや救急車、患者搬送用車両すべてに間仕切り用カーテンやアクリル板を設け、発熱症状があったり、感染の疑わしい方がいらっしゃった場合は、運転手も医療スタッフと同様に感染防護衣を着用しての運転となりました。8月の暑い中、エアコンをつけても汗だくなるような環境下でフェイスシールドを曇らせながら懸命に感染予防と安全運転に努めてくれました。



患者さんの搬送中だけでなく、搬送後も紫外線照射殺菌装置で消毒し、アルコールで拭き上げるなど、最後まで気を抜かず感染対策に努めた。

平常を保ってくれたスタッフの存在も

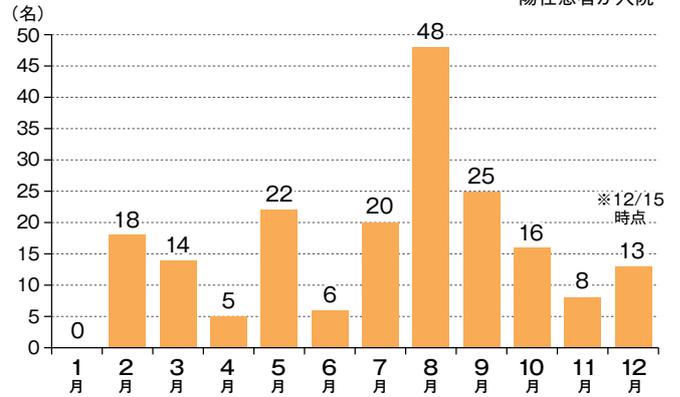
コロナ対応に手が取られるスタッフが居る一方で、その穴埋めをしながら日常業務をしっかり回してくれたスタッフの存在も忘れてはいけません。

以前、救命救急センターの根岸センター長が、当院のことを、「近森は全員野球」と話されていました。それぞれに役割があって誰か一人が欠けても成り立たないということでしたが、今回のコロナ対応ではその言葉の重みを実感します。われわれ管理部もこの全員野球の一員として引き続き現場の支援に力を尽くしていきたいと思っています。

近森病院のコロナ関連データ (2022年1月1日~12月15日時点)

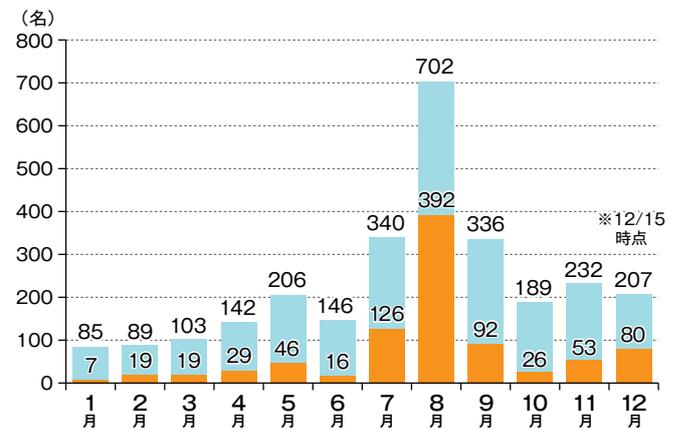
コロナ病棟新規入院患者数

※中等症II・重症の陽性患者が入院



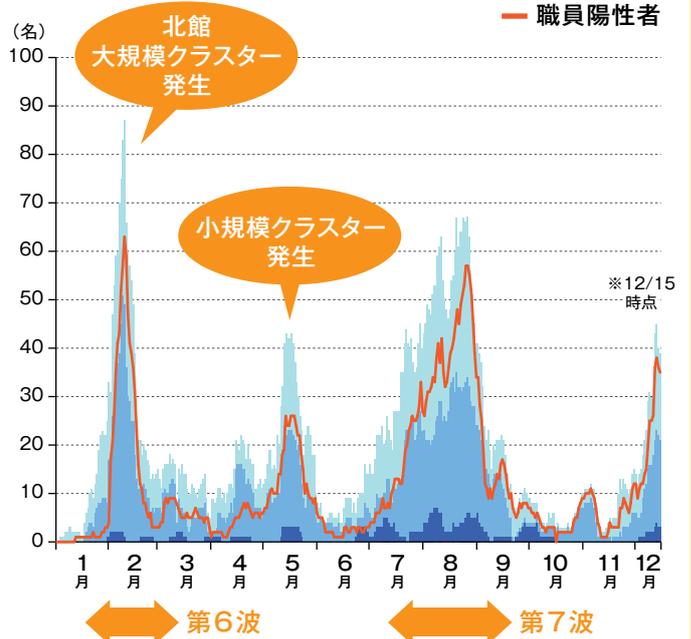
発熱外来受診者数

■ 内、陽性者



陽性・濃厚接触者関連で自宅待機している職員の状況

■ その他
■ 看護師
■ 医師
■ 職員陽性者



論文掲載

祝!!連続掲載
英文論文3編目投稿

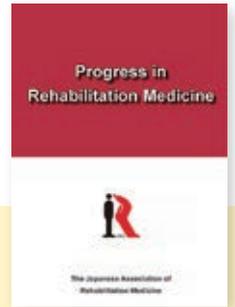
GERDを有する脳卒中患者における
ブリッジ(腰上げ)嚥下訓練:ケースシリーズ



近森リハビリテーション病院
リハビリテーション科
科長
青山 圭 あおやま けい

人は逆立ちしても食べられるのか?
私が以前、浜松市リハビリテーション病院への国内留学中に「重力に逆らって嚥下をしたら食道の蠕動や、食道括約筋の圧はどうなるのか」というテーマを頂きました。機器を用いて測定した結果、食道は重力に逆らって強く収縮することが分かり、論文化しました。
実際に逆立ちする訳にはいきませんが、「寝た状態で腰の下にクッションを入れて重力に逆らう姿勢で嚥下を行う」ことで、これまで報告されていない食道を鍛える訓練となる可能性ができました。
今回は胃食道逆流症(GERD)を有する脳卒中患者さんで、同訓練の効果を検討した症例報告が受理されました。結果としては、

閲覧はこちらから↓



論文名

Bridge Swallowing Exercise for Stroke Patients with Gastroesophageal Reflux Disease Symptoms: A Case Series

掲載誌

Progress in Rehabilitation Medicine 2022;Vol.7,20220058(日本リハビリテーション医学会 発行)

訓練の前後で、GERD症状の改善が得られ、さらに嚥下造影検査(VF)では食道内のバリウム残留が減少した方もおられました。
多くの先生方にご指導いただいたおかげで、少しずつ結果がでていくことを嬉しく思います。一方で、本当に訓練の効果があるのか、未知の領域にリハビリテーションが貢献するためにはまだまだ検討の余地があり、多施設の先生方と研究を継続していきたいと考えています。
そして高齢化先進県である高知県、その中核病院である近森会からも、食道を鍛える訓練「腰上げ嚥下」を発信していけるよう尽力いたします。特に、消化器領域の先生方にはご協力をお願いさせていただくこともあるかと存じます。その際にはご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

講習会

サマースクール 2022年8月27~28日

近森病院 心臓血管外科 森河内 萌 もりこうち もえ

8月末、当院の初期研修医2名(濱田医師・廣瀬医師)と一緒に神戸で開催されました「心臓血管外科サマースクール2022」に参加してきました。コロナ禍ということもあり、全国3会場+web参加に分かれてのHybrid形式の講習会でしたが、実際に豚の心臓を用いた手技の体験(ウェットラボ)と心臓血管外科諸先生方による講習がプログラムされており、2日間非常に濃い体験をすることができました。

スクール受講者は医学生~3年目までの医師で、外科系を考えている初期研修医と多く知り合うことができました。心臓血管外科を志す同年代は今後の医者人生においても永く付き合う貴重な仲間であり、切磋琢磨できる関係を築いていけたらと思います。
何より大きい収穫だったのは、普段あまり接する機会のない外の病院の先生方から指導を受けることができたことです。色々な先生とお話しすることは刺激になり、自身の勉強法や日々の診療の仕方を見直す良い機会となりました。

今回のスクールで得たことを日々の診療に活かせるよう、これからも精進します。



▲左、濱田研修医



講演会

高知医療再生機構講演会・シリーズ企画 「高齢者を診る・識る・癒す」 〈第1回／2022年11月17日〉

学術担当顧問 土居 義典 どい よしのり

超高齢社会を迎えた我が国の医療現場では、単一の専門性だけでは解決できない超高齢患者への対応が求められています。このシリーズ企画は、潜在する癌や脳・心・腎の動脈硬化病変、多臓器疾患などの超高齢患者に特有の病態への理解を深め、専門性のある診療とともに高齢者の命にしっかり向きあう医療を目指して企画されたものです。第1回は高知大学内分泌代謝・腎臓内科学の寺田典生教授による腎機能障害への理解を深める御講演が行われました。今後は右記の通り御講演（全4回）が予定されていますので、多くの方々の御参加を期待しています。



▲中央：講師の寺田典生先生、向かって右隣：執筆者の土居学術担当顧問

第1回	2022.11/17 (木)	演題 「高齢者における腎機能障害の診療のポイントと最近の話題」 講師 寺田 典生 先生（高知大学医学部 内分泌代謝・腎臓内科学教授）
第2回	2022.12/15 (木)	演題 「糖尿病診療の最近の動向」 講師 藤本 新平 先生（高知大学医学部 内分泌代謝・腎臓内科学教授）
第3回	2023.1/5 (木)	演題 「今こそ必要とされる日常診療における老年病学的視点」 講師 北岡 裕章 先生（高知大学医学部 老年病・循環器内科学教授）
第4回	2023.1/19 (木)	演題 「COPDをご存じですか？～健康寿命の延伸に向けて～」 講師 横山 彰仁 先生（高知大学医学部 呼吸器・アレルギー内科学教授）

※すべて、時間／18:30～19:30(予定)、会場／近森病院管理棟3階会議室

特別講演会「単純化を目指したMICS僧帽弁手術」 旭川医科大学 心臓血管外科学分野 教授 紙谷 寛之先生 〈2022年11月18日／Hybrid開催〉

近森会 副理事長 入江 博之 いりえ ひろゆき
(近森病院副院長 兼 心臓血管外科主任部長)

紙谷教授は、10年以上の長きにわたりドイツの心臓外科臨床第一線で活躍されておられました。複数回にわたる留学の経緯等を裏話を含めてお話くださいました。この部分は、若手医師にとっても印象的だったようです。また、小切開による僧帽弁手術についてのご経験並びにご意見を披露されました。傷が小さいだけで手術時間が長いのは低侵襲とはいえない。手術手技に関しても、色々なパターンの修復術の技術を身につけておく必要がある等のお考えを示されました。Hybrid開催であり、県外からも含め合計34名の参加がありました。会場にいた循環器内科医達からも、内容に納得できたというコメントや質問が寄せられていました。旭川医大心臓外科には、毎年3名程度の新規入局者があってのことで、人気の程がうかがえました。



▲旭川医科大学 心臓血管外科学分野 教授 紙谷 寛之先生



▲中央：講師の紙谷先生、向かって右隣：執筆者の入江副理事長、左隣：麻酔科小坂主任部長

施設認定

日本脳卒中学会 一次脳卒中センター(PSC)“コア”

※PSC…Primary Stroke Center

近森病院 脳神経外科 部長
林 悟 はやし さとる



四国4県で8施設

高知県内初となる脳卒中専門の病棟(SCU)が2012年4月にスタートしてもうすぐ11年になります。この度、日本脳卒中学会から一次脳卒中センターのコア施設に認定されました。当院を含め四国4県では8施設が認定されています。

【一次脳卒中センター】 いつでも急性期脳梗塞に対する 速やかなtPA治療が可能

これは2019年12月に「脳卒中・循環器病対策基本法」が施行されたことにより、日本脳卒中学会と国が進める脳卒中对策の一環で整備された施設認定です。一次脳卒中センターは、主に急性期脳梗塞に対するtPA静注療法を地域の偏在なく広く行うための施設です。

【コア施設】 機械的血栓回収療法も実施する 地域の中心的な役割

そしてコア施設は、一次脳卒中センターの役割に加えて、脳血管に詰まった血栓をカテーテルで取り除く機械的再開通療法を行うことができる専門医



の数や実施件数など、いくつかの条件を備えた施設です。

再発予防などの啓発活動や脳卒中患者さんの退院後の問題などに対応する「脳卒中相談窓口」(下写真)の活動も必要とされています。

チーム医療、退院支援、地域との連携を継続して

近森病院ではSCU開設当初から行なっていた、多職種での脳卒中急性期治療および退院に向けての支援や回復期リハビリ病院等との連携が施設認定という形になりました。

脳卒中患者さんの入院から退院まで、多くの皆さんが関わってくださり活躍された賜物と感じています。引き続き脳卒中診療にご協力をお願い致します。



ハッスル研修医

近森会グループで元気に働く仲間を紹介します

後悔のない研修医生活のために



初期研修医 1年目
高本 琴子
たかもと ことこ

熊本出身で、大学から高知に来て7年目になります。

温かい人、美味しい食べ物やお酒に囲まれ、とても恵まれた環境で研修医生活を送れることに感謝しています。

早いもので研修をはじめて10ヶ月となりました。最初は業務に慣れるのに必死で、日々をこなす毎日でしたが、最近は少しずつ慣れてきて、振り返る時間ができ、自分に不足していることに気がつくようになりました。

自分の未熟さを痛感し、落ち込むこともありますが、同期や周りの先生方、コメディカルの方々の優しさに支えていただきながら、日々成長できるように努めています。

あと数ヶ月で後輩もでき、焦る気持ちもありますが、日々の反省を活かし、一つ一つ確実に自分のものにして、少しでも自信をつけて2年目になりたいと思います。

少しでも早く一医療者として貢献できるように頑張りますので、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

給与・賞与明細書のWeb化について

総務部 総務課
田村 達彦
たむら たつひこ

2022年11月分給与より給与・賞与明細書をWeb化しました。目的は職員の利便性向上と業務の効率化・コスト削減です。

まず、職員の利便性向上として、

- 休暇などで支給日に不在であっても手元に届くこと
- 過去分の照会と出力が可能であり、紙を保管する必要が無いこと

次に、業務の効率化・コスト削減として、

- 明細書の受け取りの為、所属長等に総務課まで来てもらっていましたが、今後はその必要がなくなること
- 総務課の印刷、圧着、休職者への郵送にかかるコストが削減されたこと

が挙げられます。



年末調整Web申告も好評

また、年末調整のWeb申告は2年目となり、昨年の入力情報を引き継いでいることで申告が楽になったとのお声を多数いただきました。源泉徴収票配布も昨年と同様にWeb配信です。パスワードはお忘れなきようお願いいたします。

ファミーユ高知より



しごと・生活サポートセンター ウェーブ 第2回きたほんまちマラソン

2022年10月30日

昨年に引き続き、ウェーブがある北本町を舞台にマラソンを実施。1周4kmを走る人、走れる距離だけ走って次の人にたすきをつなぐ人、それぞれの思いを胸に北本町を走りきりました。コロナ禍で気持ちは沈みがちでしたが皆の汗と笑顔が街を元気にしてくれました。



ハビリの秋祭り

高知ハビリテリングセンター
生活・訓練部 部長

2022年11月3日

島崎 義広 しまさき よしひろ

2022年11月3日に当センターの利用者さんのみを対象とした、ささやかな秋祭りを開催しました。ステージイベントや販売に利用者さんが参加することにより、チームで協力する経験や就労準備などの機会になったようです。夜は入所者を対象としたサプライズ花火大会。少し季節外れの風物詩を楽しみました。来年こそは地域の方にもご参加いただけるイベントが出来るよう願っています。



健康保険組合高知連合会 ウォーキングイベントの受賞

近森会健康保険組合
事務局長

田村 裕彦
たむら ひろひこ

11月1日から30日の間、健康保険組合高知連合会主催のスマホアプリ利用のウォーキングイベントがありました。所属する県内4組合（四国銀行、高知銀行、キタムラ、近森会）に加入する希望者234名が参加し、近森会健保からは38名が参加して1か月間の平均歩数を競いました。

受賞は歩数が多ければ良いということではなく、連合会が1歩でも歩数登録のある方を対象として抽選したようです。当組合からは5名の方が受賞し、体組成計が当たったICT推進課の大野さんに記念撮影をさせていただきました。アプリ利用で顔も見えないイベントでしたが、期間中は個人順位や組合別の平均歩数順位の表示もあり適度に競争心も刺激されました。ご参加頂いた方大変ありがとうございました。



中央：執筆者
向かって左：健保組合より記念品を贈られる大野さん

ありがとう
ございます!

子ども食堂と、アイメイト(盲導犬育成支援事業)の募金箱を設置し、活動に協力しています。

今回、それぞれ感謝状を頂きましたので、いつも募金してくださっている皆様に、お礼かたがたご報告いたします。



アイメイト

可愛い盲導犬の募金箱が目印。募金の度に感謝状を頂いています。

子ども食堂

2019年から高知県を通じて募金し、今回2回目の感謝状を。



75周年記念 写真集 完成!

各部署の今を撮影した写真集がようやく完成を迎え、2022年12月職員向けに配布を行いました。



書籍紹介



サイズ/四六判 234ページ
定価/1,870円(税込)
発行/2022.12.15
株式会社 PUBFUN
ネクパブ・オーサーズプレス

*Amazonより
ご購入
いただけます



高知大学名誉教授 森惟明先生 近刊書

『米寿を迎えた脳神経外科医の多病息災健康術』

高知大学 名誉教授 森 惟明先生 / 著
もり これあき



米寿医師による「多病息災」とは？

人は、老いても、病気になっても、健やかに生きることができます。病気と共に生きながら、夢や生きがいを失わず活躍してきた88歳医師が、自身の経験から「多病息災」で年を重ねる方法を解説します。

世間では「アンチエイジング」や「無病息災」などの言葉がもてはやされ、「健康至上主義」の風潮が続いています。しかし、人生100年時代の現代において、どれほどの人が無病息災で生きられるのでしょうか。老化・加齢に伴い、ほとんどの人は何らかの病気にかかるのです。現実にとぞくわない「健康至上主義」はかえって私たちを苦しめます。

「多病息災」で
生きるために

老いても、病気になっても、健やかに生きるにはどうすればよいのか。本書では、高知大学名誉教授である著者が、自身の経験と実践を基にした健康術を具体的にお伝えします。

【筆者略歴】1934年大阪府生まれ。京都大学を卒業後、国内外の病院で従事し、1981年高知医科大学(現高知大学医学部)脳神経外科の初代教授を務める。厚生省研究班班長、高知県医師会理事、国際小児神経外科学会倫理委員会委員長などを経て、現在は高知大学名誉教授。著書多数。



12月9日、今年度のMVP受賞者が発表されました。コロナ禍のため今年も忘年会はありませんでしたが、功労者のための授賞式が行われ、感謝の言葉と一緒に豪華副賞が贈られました。受賞者の皆さん、おめでとうございます。



MVP受賞者には記念のバッジが贈呈されました。



近森病院 救命救急センター ER (写真左)・救命救急病棟 (写真右)

コロナ感染症が第7波(7~8月)で県下に大規模にまん延した際に、救急現場の「最後の砦」となり、一般救急搬入との両立を果たし高知県の医療を支えた。



近森病院 CU病棟

第6波(2月)の院内クラスター発生時に自部署でコロナ患者を受入れながら、他病棟やリハ病院への応援業務も並行して行い、臨機応変な対応で近森病院を支えた。



近森病院 北館2階病棟

第7波に際し、病院全体の動きを考え、急遽スタッフの増員が必要になった他部署への一時異動の提案を快く受入れ、慣れない部署でも柔軟に対応し近森病院を支えた。



SRL検査室

新型コロナウイルス抗原検査を2020年7月に開始し、第7波では毎日500件を超える検査や試薬の確保、感染力の強いオミクロン株への対応も迅速、確実に行ったことで当院の救急医療、職員を支えた。



近森病院 外来化学療法チーム

年々増加する外来化学療法患者に対し、多職種チームによる総合的なサポートで、化学療法オーダーに支持療法をプラスし、予後とQOLを向上させた。



企画課・施設用度課

コロナ感染症のまん延に際し、3年間にわたり院内環境の整備や資機材の購入・搬入・設置、またCU病棟の立ち上げ・体制整備など、迅速に対応し診療現場を支えた。



危機管理部

院内の暴力行為や迷惑行為の排除などはもちろん、設備などの異常の発見や来院者・職員・業者の動向を注視し、柔軟かつ的確な対応により、院内の平穩維持に貢献した。



社会福祉法人ファミリー高知 教育委員会

人材育成システムの構築に取り組み、2021年からは成果発表会も開催。日々の支援を可視化・共有しサービスの質の向上を図ることで病院や学校からの紹介も増え、地域から必要とされる組織に成長させた。



近森病院 医療福祉部
ソーシャルワーカー

市川 由佳梨

病院と患者・家族双方に不利益が及ばない最善の方法を模索し、後方病院・施設との交渉を実践することで退院・転院調整をスムーズに行い、入院期間の短縮、病床回転率の上昇に貢献をした。

個人
受賞



四国管財株式会社
施設管理センター

明神 了平氏

多岐にわたる病院の設備の不具合調整や修理、水回りのトラブルなど、いつも嫌な顔をせず対応し、また、担当以外の機器や物品相談にも応じるなど、施設整備に貢献した。

個人
受賞

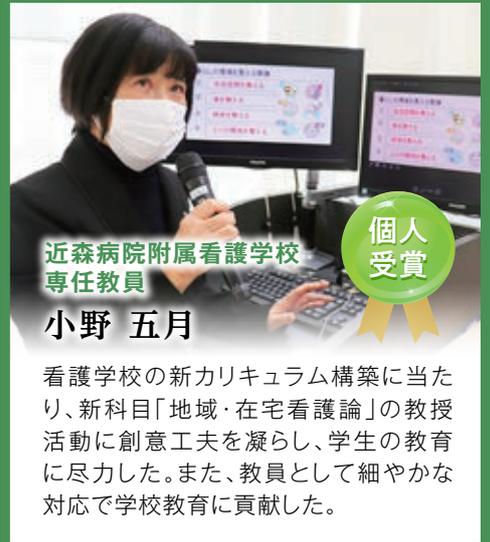


近森病院附属看護学校
専任教員

小野 五月

看護学校の新カリキュラム構築に当たり、新科目「地域・在宅看護論」の教授活動に創意工夫を凝らし、学生の教育に尽力した。また、教員として細やかな対応で学校教育に貢献した。

個人
受賞



総合心療センター メンタル4階病棟 看護師

堀尾 恵 (写真左)

「自分でも気がつかない悩んでいることを助言してくれたり、わからないことを教えてくれ、先生とスムーズにコミュニケーションをとれるよう仲介してくれた」「親身に話を聞いてくれた」

総合心療センター メンタル4階病棟 看護師

吉野 都 (写真右)

「安心して話せる人で困った時に私のペースに合わせてくれたり、良い距離感でサポートしてくれた」「忙しい時も笑顔で大きな声で明るく接してくれてこっちまで元気になった」

患者
アンケート
上位

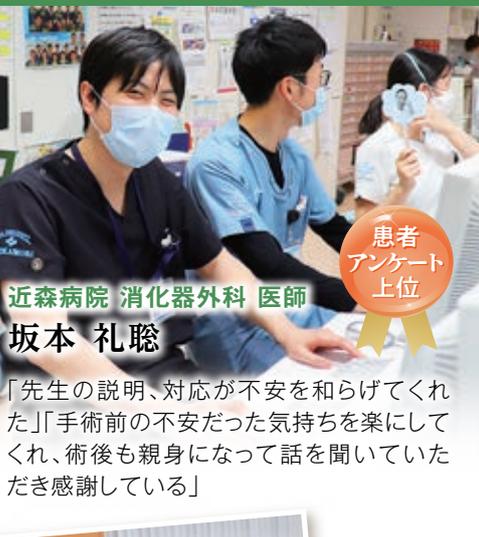


患者
アンケート
上位

近森病院
7階A病棟
看護師

町田 菜々子

「術後の痛みに耐えている時、持ってきたカレンダーやDVDについて聞いてもらえ、嬉しく痛みも忘れてしまうくらいだった」「いつも明るく接してくれ、入院生活が楽しく過ごせた」



近森病院 消化器外科 医師

坂本 礼聡

「先生の説明、対応が不安を和らげてくれた」「手術前の不安だった気持ちを楽にしてくれ、術後も親身になって話を聞いていただき感謝している」

患者
アンケート
上位

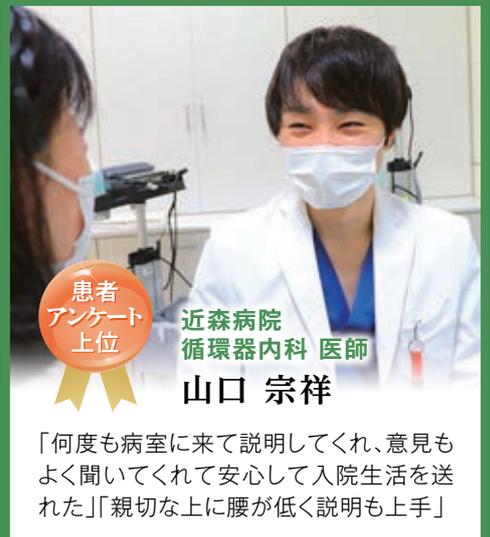


近森病院
消化器内科 医師

町田 彩佳

「当方の事情を踏まえて調整していただき診療の当初からとても親切・適正に対応してくれた」「結果が出ると家族にまず電話を下さった」

患者
アンケート
上位



近森病院
循環器内科 医師

山口 宗祥

「何度も病室に来て説明してくれ、意見もよく聞いてくれて安心して入院生活を送れた」「親切な上に腰が低く説明も上手」

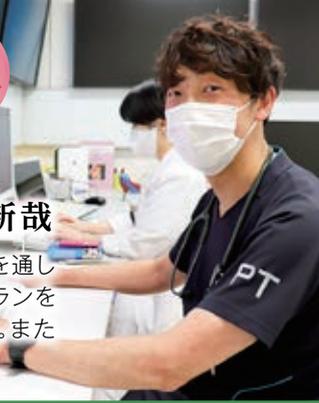
患者
アンケート
上位



近森病院 理学療法士 井上 新哉

患者の生活背景を的確に捉え、術前・術後を通して寄り添い、生活スタイルに沿った訓練プランを立て、早期に自宅復帰できるよう尽力した。また多職種との連携にも積極的に取り組んだ。

ハート
センター

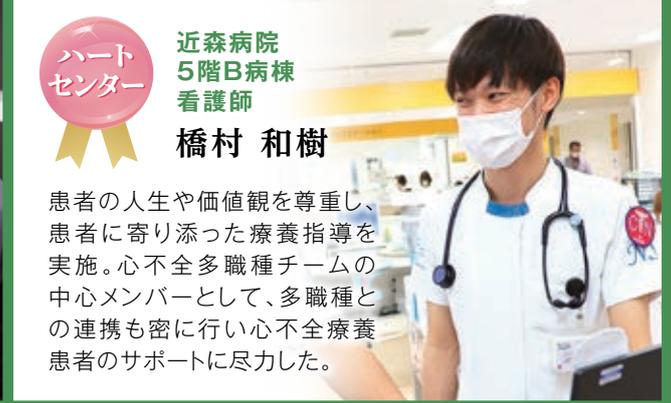


ハート
センター

近森病院
5階B病棟
看護師

橋村 和樹

患者の人生や価値観を尊重し、患者に寄り添った療養指導を実施。心不全多職種チームの中心メンバーとして、多職種との連携も密に行い心不全療養患者のサポートに尽力した。





リレーエッセイ



▲ 生後2ヶ月頃
2022年2月、引き取って
すぐの頃の写真

生後11ヶ月▶
近所のコスモス畑にて



私の推し

近森リハビリテーション病院 3階病棟西
介護福祉士 青木 友恵 あおき ともえ



私の“推し”は愛犬のモネです。2022年2月、高知市内の動物病院で行われていた保護犬の譲渡会に足を運んだのがきっかけで飼い始めました。子供達は成長し親の相手などしてくれず、またコロナの影響でお出掛けもままならず、家で時間を余していた所にモネはやってきました。すぐに我が家のアイドルとなり、今まで自分の部屋で過ごす事の多かった子供達がリビングに集まる機会も増え、家族のみならず親戚中に溺愛されて、ワガママ犬に益々拍車が掛かっている今日この頃です。

モネは四万十市で民間の団体に保護され、私たちの元にやってきました。私自身も実際に保護犬に接するまで詳しくは知りませんでしたが、高知県の犬猫の殺処分数は減ってきてはいるものの0ではありません。命を粗末にせず、保護犬・保護猫という言葉が、この世の中から消える事を切に願います。



私の趣味

ちょこっと外出

臨床検査部 臨床検査技師
川上 優衣 かわかみ ゆい



なかなかコロナが収まらなくて外へ遊びに行きにくい中、皆さんはどのように過ごされていますか。



私は高校生の時に部活動でしていた弓道を久しぶりにしようと思っついこの間弓道場に行ってきました。弓道自体は高校の3年間だけで大学ではやっていなかったの弓を持つのは数年ぶりです。「すごく久しぶりだなあ。できるかなあ。」と思いながら高知城の近くの弓道場に行ってみました。やっぱり普段使っている筋肉とは全然別の所なんです。少しやってみただけで腕がとても痛くなってしまいました。休み休みで数時間ほどしたのですが、筋肉痛で2日ほど苦しみました。日頃の運動ってとても大事！これから定期的に通ってみようかなと思います。

皆さんもおうち時間が増えたと思いますが、たまには外に出てリフレッシュするのもいいですよ。早く以前の日常に戻ることを祈って「ちょこっと外出」で頑張ります！



筆者・左端



私の〇〇

まるまる
〇〇にフリーワードを入れて
語っていただきました



私の「息子」

近森病院 6階A病棟 看護師
岡崎 麻衣子 おかざき まいこ



小学校5年生の息子は2021年秋頃より少年野球を始め約1年が経ちます。週に3日は練習、土日は練習試合と頑張っています。監督も熱心で私も指導を聞きながら一喜一憂し涙を流す時もあります。10月には初めての公式戦デビュー。ベスト8まで勝ち進み、みんなで涙を流し喜びました。

私自身の私生活も少年野球に関わることで大きく変わりました。以前は、休日にはビデオ鑑賞をしたり買い物に行ったりしていましたが、今では必ず練習試合に付き添い、保護者はチームTシャツを来て応援しています。練習試合は、越知町や南国市十市など市内だけにとどまらず、保護者で協力して車を出し合いサポートしています。私自身も保護者との関係も良く、また息子の頑張っている姿を観ることで、元気を貰い明日への活力となっています。これからも息子の為に応援していきます。



今月のちかもり食

11月に使用した米量

紹介者 エームサービス株式会社
近森病院本館事業所
沼 亜弥さん
ぬま あや



今回は11月に使用した米量を計算してみました。

本院での米の使用量は約2,500kg(約2トン500kg)程度。1リットルの水が2,500本分の重さになります。大きな釜で炊いて大きなしゃもじで毎日対応しています。



歳時記 クリスマスツリー



近森病院

例年ツリーを設置して

いる場所がコロナ対応スペースとなっているため、閉鎖中のイートインに設置しました。スペース全体に装飾があり、また間近にツリーも見られ、いつもより華やかな雰囲気を楽しんで頂けたと思います。



総合心療センター

オーナメントにはそれぞれ意味があり、ツリーの頂点のトップスターには、「希望」などの意味があるそうです。コロナ禍ではありますが、輝く星を心に持って2023年もがんばります!



看護学校通信

「実習成果発表会」を終えて

2022年11月25日

近森病院附属看護学校 教務主任

西本 清香 にもと きよか

11月25日に、6期生の「実習成果発表会」を開催することができました。

学生たちは、患者さんの安全・安楽、回復を促進するためには看護師としてどのように向き合い援助を行う必要があるのか、それに向かって自分はどうすべきかをしっかり学ぶことができていました。6期生は入学後より、新型コロナウイルス感染症の影響で学内での演習や臨地実習にも制限があり大変な3年間でした。その中でも、しっかりと学習してきた6期生の底力と、忙しい中でも学生に向き合って指導して下さった臨地の皆様の指導力を垣間見ることができました。



発表会終了後、6期生全員の最後の白衣姿

編集室通信

「プレバト!!」という番組をご存知だろうか? 有名人が俳句や水彩画など様々なジャンルに挑戦し、昇格!、名人認定! など、ランキング形式で紹介されている。特に私は絵の部門が好きで、講評も割としっかり見ている。業務上、様々な病変を描くことが増え、出血の広がり方や腫瘍の表面など苦戦しているが、素人の医療イラスト部門があればぜひ挑戦したい。 まっちゃん

診療数 令和4年11月

— 電子カルテ管理課 —

● 近森会グループ

外来患者数 18,160人
新入院患者数 1,072人
退院患者数 1,030人

● 近森病院(急性期)

平均在院日数 12.02日
地域医療支援病院 紹介率 98.18%
地域医療支援病院 逆紹介率 296.54%
救急車搬入件数 565件
うち入院件数 309件
手術件数 557件
うち手術室実施 342件
うち全身麻酔件数 232件

西岡 由江

Yoshie Nishioka

高知ハビリテリングセンター
センター長

聞き手／ひろっぱ編集部



ハビリと地域に
ワクワクの風を
なびかせて

「もともと精神科看護だけは避けたかったんです。閉鎖病棟の実習中に“鍵を閉められた”時の感覚や独特の雰囲気にながてな感情をぬぐうことができなかったから」。しかし大学病院時代の同期から「精神科が向いている」と紹介されたのが、大阪で初めて地域に精神科クリニックを開業した三家クリニック。面接で「目に見えない精神障害に、どんな看護ができるか不安がある」と断るつもりで告げるも「その思いがあれば大丈夫!」と言われ、就職。そこで精神科看護のやりがいを知ること。

やがて帰高し、三家先生の紹介で近森病院へ就職。「近森の風土は私にありました。デイケアではOTさんたちとプログラムを考えていろいろと挑戦させてもらえました。おかげで、始め1日10人だった利用者さんが1年半で50人になりました」。その後、ファミリー高知「ウェーブ」の施設長を経て、2018年より「高知ハビリテリングセンター」の立て直しを期待されセンター長に。現在は、県内3か所の看護学校で精神科看護の教鞭もとる。先日、精神保健福祉事業功労者に対する厚生労働大臣賞を受賞した。



大野見の実家で田を継いだ弟から、毎年、稲刈りの応援要請があり、市内に住む妹含め、家族全員で農作業をする。普段は、看護師を目指す姪(弟の娘)と市内で同居。

“メンター”と慕う 二人の先輩看護師の存在

その二人とは、近森病院の先輩看護師であった梶原和歌さんと仲野栄さん。「梶原さんの口癖が『いいこと思いついた』と『願えば叶う!』で。私、しっかり巻き込まれていきましたね。例えば愛宕にウェブがあった頃、電話がかかってきて、『前にコンビニできたでしょう?あそこで利用者さん就職できないかしら!』って。早速あいさつに行きましたよ」。

一方、仲野さんには看護師としての考え方を習ったという。「彼女は真っ向から否定しない方です。今も、この決断が正しかったのか、考え方が偏っていなかったかと悩めば相談しますが、そんな時も『自分を信じて』と背中を押してくれます」と。そんなエピソードは、なんだか周りから聞き漏れてくる西岡センター長のイメージと重なった。

ハビリセンター長に就任

「ハビリのセンター長に就任する時は、腹をくっていましたね」。支援が必要であったハビリのリーダーとなった後は、持ち前の几帳面さで事務的な見直しをするともに精神科看護師として培った調整力をさらに発揮した。最も大切にされたことは、利用者さんの笑顔と、地域貢献などするべきゴールさえ決まっていたら、やり方はスタッフに任せることだった。以前のトップダウンの風潮からボトムアップヘシフトチームをまとめていった。副センター長以下、部長を中心に各自が考えて、新しいことにチャレンジし続けてくれたとその仕事ぶりをまるで戦友の活躍を自慢するように、揚々と語ってくれた。



今秋、ハビリの利用者、久家一輝さんが国体の卓球種目で優勝し、センター長は介助者として参加した。「監督が熱い方でねえ」と笑うが、負けず劣らずセンター長も熱かっただろう。実はスポーツマンで勝負にこだわるタイプ。「最近は“ほどよい負けず嫌い”になりましたよ。その方がうまく事がまわるから」。

去る11月15日、キュール(ハビリに属する放課後等デイサービス)の現地指導があり、指導員から「注意することは一切ありません。こちらの方が勉強になりました」という言葉をいただいた。この時に、長いトンネルを抜け光が見えたという。自分たちのやり方に、一つの正解を見いだせた。

夜は明けた。これからがスタート

「やりたいことがたくさんあります。近くに耕作放棄の田があるんですよね。あそこで米栽培をして、利用者さんたちと育てた米を食べると嬉しいですよ。それから、この辺りは高齢者も多いので、クリーニングサービスも良いかと。あと、はちみつを作っていて、それで飴を作って販売する企画も進んでいます」とやりたいことが溢れているようだ。

「ハビリが元気になることで、地域も元気になってくれることが私の理想。高齢者も障害者も楽しく暮らせる地域を作りたいんです。思いを共有してくれるスタッフがいる、一緒に走ってくれるから、ワクワクしているんですよ」。

